

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

データベース公開がはじまりの一步<基幹研究：民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討>

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館 公開日: 2020-10-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 齋藤, 玲子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00009583

データベース公開がはじまりの一步

文・写真 齋藤 玲子

本プロジェクトは、国立民族学博物館（以下、民博）が所蔵するアイヌ民族に関する標本資料の情報を充実させ、アイヌ文化に関心をもつ人びとにとってより利用しやすいデータベースを提供することを目的とした。2016年度から研究・開発を進め、2020年3月に4年間の実施期間が終了したところである。近年、アイヌ文化への関心は高まっており、標本資料は民博での展示などの利用のみならず、他機関への貸し出し、研究や複製のための特別利用も頻繁におこなわれている。そこで、プロジェクトの共同研究員として、大学教員、博物館職員、公益社団法人北海道アイヌ協会や公益財団法人アイヌ民族文化財団といった団体の職員に加わってもらい、データベースのあり方について検討を重ねた。詳細はプロジェクトの1年目と2年目に寄稿した『民博通信』の報告を参照いただくこととして（齋藤 2016; 2018）、本稿では新しいデータベースの特徴、最終年度におこなった国際ワークショップの成果と、今後の課題について述べたい。

「民博所蔵アイヌ民族資料データベース」の特徴

本プロジェクトを含めた本館のフォーラム型情報ミュージアムプロジェクトの開始当初は、プロジェクトごとに適したものにしようという意図で、それぞれ異なるデザインでデータベースが作成されていた。実際、映像や音響資料が主体のものは、独自に設計する必要があったが、多くは標本資料を対象とするデータベースなので、次第に基本のデザインが定まっていった。本プロジェクトの「民博所蔵アイヌ民族資料データベース」（以下、新アイヌ資料データベース）は、すでに公開している「日本の文化展示関連情報データベース」[🔗](#)と「北米北方先住民関連文化資源データベース」[🔗](#)と同様のデザインをベースに、新たな分類や検索システムを付加した。また、「ジョージ・ブラウン・コレクション」[🔗](#)のデータベースと同様に、資料を受け入れたときの情報と、新たに判明した情報とを分けて表示したことが特徴である。

民博の標本資料詳細情報データベース（館内関係者のみ閲覧可）には、収集者による資料の情報や、他機関から管理替えされたものは移管時の台帳の記載事項が登録されているが、少なからず間違いや情報の欠落があった。本プロジェクトでは、それら情報の見直しや関連文献との照合、熟覧調査などにより、適切な情報（推定含む）を付与し、「最新データ」

とした。しかし、収集時あるいは台帳作成時のデータも時代を反映するものであり、新たに付け加えた情報が誤っている可能性もあるので、「登録時データ」も残した。

また、既存のデータベースには記載の不統一もある。多くのプロジェクトで苦労しているのが、同じ用途のものでも資料名がまちまちということである。たとえば、貸し出しや熟覧の希望が多い衣服について、登録時データには「木綿衣」「樹皮衣」「魚皮衣」など「素材+衣」という名称が多いが、「刺繍衣」「切伏せ文衣」のように「文様の技法+衣」という名称も少なくない。「衣」で検索すればよいかというと、「着物」と登録されている資料もある。本プロジェクトでは、現時点で適切と考える資料名を「最新データ」に入れることにし、この例では「衣服」とした。資料名のアイヌ語は、千葉大学大学院人文公共学府の大学院生・阪口諒に監修してもらい、日本語ページにアイヌ語のカナ表記を、英語ページにローマ字表記を入れた。また、総合研究大学院大学文化科学研究科（民博）の大学院生・サクマ シャルゲイに資料名のロシア語データを作成・入力してもらった。

さらに、検索する人がどのような資料名を使うかわからないため、資料の属性で分類し、検索できるようにした。プロジェクトメンバーによる研究会では、多様な利用者を想定し、地域と用途と収集者を組み合わせて検索できるようにするなど、どのような機能をもたせれば使い勝手がよいか、意見を出し合った。

その結果、地域は、収集・使用・製作された場所（市町村名。それ以下は個人情報に配慮して判断）だけではなく、北海道・樺太・千島列島・その他・不明に分け、さらに北海道は日高・胆振・十勝など現在の14の行政区分に、樺太は東海岸と西海岸に、千島は色丹島とそれ以外に分類することにした。用途別では、「生業」「衣」「食」「住」「儀礼・信仰・知識」「娯楽・芸能」「交通・交易」「その他（現代）」という8つの大分類とその下位の分類を設けた。資料は1つの分類だけに属するわけではなく、儀礼用食器のように複数の分類に当てはまるものもある。このように分類することで、さまざまな条件で検索して、調べたい資料を絞りこめると同時に、地域的な傾向や収集された資料の偏りなどもわかり、コレクション研究に役立つだろう。

なお、民博に所蔵されるアイヌ民族関連の標本資料の点数は、プロジェクト開始時の2016年に既存のデータベースで



「民博所蔵アイヌ民族資料データベース」のトップページ。
2020年7月時点では館内限定公開。今秋以降に一般公開予定。

検索した際は5,000点弱であった。当時未登録だったものや、その後収集された資料もあり、所蔵資料を見直す過程で、アイヌ民族資料と分類されていなかったものなかにアイヌのものとして推定される資料も含まれていたことなどから、最終的に新しいデータベースに登録された資料は5,400点を越えた。これもひとつの成果である。

国際ワークショップの開催

2019年9月15日には、国内外の大学・博物館・アイヌ民族関係団体の研究者・職員らを招聘して国際ワークショップを開催し、一般にも公開した。その内容は次のとおりである。

ロシア科学アカデミー・ピョートル大帝記念人類学民族学博物館（クンストカメラ）のアンドレイ・ソコロフ研究員と、サハリン州郷土博物館のアンナ・レフホフスカヤ研究員は、それぞれの博物館が所蔵するアイヌ民族資料の収集の歴史と、それらがどのように継承され、近年どう活用されているかについて発表した。日本の研究者との共同調査や、その成果としての展示やカタログ、データベースについても紹介した。

国立アイヌ民族博物館設立準備室（当時）の中井貴規研究員は、2020年に開館する同館の収蔵品管理システムについて、管理や研究のために整備するのみならず、公開や他の博物館とのネットワークを視野に、アイヌ語辞書機能なども活用しつつ、運用しながら改善するかたちで進めていることを発表した。

北海道大学アイヌ・先住民研究センターの山崎幸治准教授は、国内外の多数の博物館で調査をしてきた経験から、調査する資料を探し出すこと自体が重要な作業であり、多様な条件で検索でき、その履歴を残したり、関連情報とリンクできたりといった、使い勝手のよいデータベースが研究を支えると強調した。また、著作権処理の専門家を育て、世界中のアイヌ民族資料をつなぐデータベースの構築が期待されると述べた。

なお、同ワークショップでは、民博の外国人客員研究員として滞在中だったハンガリー科学アカデミー民族学研究所のダヴィド・シヨムファイ研究員にも報告いただいた。彼は、1903-04年および1914年にアムール流域・サハリン・北海道で調査をおこない、民具の収集とともに多くの記録を残したハンガリーの研究者バラートシ・バログ・ベネデクの足跡をたどる現地調査を続けている。この調査には筆者も協力

齋藤 玲子（さいとう れいこ）

国立民族学博物館学術資源研究開発センター准教授。アイヌ民族の工芸や観光の歴史、および北方地域先住民の物質文化について比較研究をおこなっている。最近の論文は「現代アイヌのタマサイー文化のシンボルとしてのピース」池谷和信編『ピースでたどるホモ・サピエンス史—美の起源に迫る』（昭和堂 2020年）。

している。シヨムファイ研究員は、現地に関係者から聞き取りをしたり、博物館で資料を調べたり、100年後のいまでも補足調査ができること、および標本資料と写真やノート類を活用し、資料と現地を結ぶ共同研究が可能であると指摘した。

筆者は試験運用中の新アイヌ資料データベースについて、検索のための分類などについて紹介し、参加者らから意見を求めた。

このワークショップを通じて、標本資料とそれらが収集された理由や状況に関する情報は不可分であることが改めて確認された。物質文化の研究においても、文化人類学の研究史においても、それら両方の情報が引き出せるデータベースは、研究の進展に貢献できるとの期待が寄せられた。

今後の課題

資料の再調査のため、製作者や旧蔵者およびその遺族らから聞き取りをし、記録は活字化したが、動画や写真を含めて、今回のデータベースには収まりきらなかった内容がある。そのほかにも、一連の収集資料が集められた背景や、あまり知られていなかった収集者に関するまとまった情報も得られたので、資料集のようなかたちで印刷物にしたいと考えている。また、国内外のアイヌ民族資料を所蔵する機関との連携も進めていきたい。

本稿執筆時点では、新アイヌ資料データベースは試験的に館内公開中であり、修正を経た後にインターネット上で公開の予定である。館外から多くのアクセスがあることを期待しているが、運用をしていくなかで、修正すべき点や要望が当然出てくると思う。それらに応えることこそ、フォーラム型情報ミュージアムの目指すところである。本稿はプロジェクトの「Final Report」となり、プロジェクトの実施期間は終了したわけだが、データベースを一般公開してからの、むしろ本番と考えている。

引用文献

- 齋藤玲子 2016「アイヌ民族資料の活用のために」『民博通信』155: 10-11。
- 2018「収集後の資料にいかにか情報を付加するか」『民博通信』160: 10-11。